2017. 12. 31

2017 年記憶に残った本

1. 「約束の日」　白崎博史著

外食業界で成長著しいＳＦＰ社（現クリエイトレストランの連結子会社で上場会社。年商 350 億円超。時価総額 600 億円超）創業者である寒川兄弟の事業承継物語である。

兄弟が事業譲渡を決意してから、日本M＆Ａセンターの仲介でファンド会社に売却する過程が前半で、ファンドの傘下で元経営陣が悪戦苦闘して株式上場するまでが後半の物語だ。

昨今中小企業の事業承継が盛んだ。その手法としてM＆Ａが活発であるが、成就してからの経営管理が実は最も重要だ。これをＰＭＩ（ポストマージャーインテグレーション）と呼ぶが、その要諦となるヒントが本書に記載されている。

2. 「成功はゴミ箱の中」　レイ・クロック著（マグドナルド創業者）

今年７月に放映された「ファウンダー～創業者」の自伝的な経営論である。出版は１９７０年代だが、現在の外食チェーン経営のエッセンスが盛り沢山である。因みに書名の「成功はゴミ箱の中」という意味は、ライバル会社のごみ箱を調べれば、材料や売れ残しから経営の内情が分かるということだ。アメリカ外食産業で生抜いた要諦はライバル会社の実態把握ということだ。

レイ・クロックはＦＣ展開を成功させた創業者として有名で、ユニクロの柳井氏やソフトバックの孫氏も「あとがき」に経営の参考にしたと記載されている。１９５０年代アメリカ経済成長のエンジンである企業文化や思想も学べる好著である。

3. 「会計不正」～会社の「常識」監査人の「論理」～　浜田康著

大手企業の不正や不祥事が絶えない。2 年前に発生した東芝は上場維持をなんとかクリアしそうであるが、富士ゼロックスの海外子会社の会計不正も発覚した。秋には神戸製鋼と三菱マテリアルの素材偽装が発覚し、日産とスバルも下請け検査で不正が露呈した。

本書は 2012 年の出版だが 2007 年からの主な不正会計事件を遡上に乗せて、その発生と会計監査人の責任を論じている。オリンパスと大王製紙事件はその代表格である。こうした会計不正と会計監査人（監査法人）との関係を批判的に分析し、多くの対応策も論じている。

4. 「新版・敬天愛人～ゼロからの挑戦」　稲盛和夫著

著者は京セラの創業者であり、ＫＤＤＩとＪＡＬの社長も勤めた名経営者である。京セラ経営の中心となる経営理念が「敬天愛人」と「利他の心」である。この本は 2012 年出版で、著者の過去の数々の著書の中から経営哲学や経営者の心構えなどのエッセンスを纏めている。

5. 「キングダム」１巻～４８巻　原泰久著

時代は紀元前２４０年頃で、秦の始皇帝の生涯が描かれている。現在なお連載中であり、やっと呂不韋との戦いに勝利した政（後の始皇帝）が名実共に秦の国王になった。最新巻では中華統一に向けて隣国趙国と激しい戦いを続けている。

昭和のマンガ界の巨人横山光輝著のマンガ「史記」に比べると圧倒的に戦闘シーンが多い。また女性の活躍する場面が多く面白い（女性の剣士や軍師が登場する）。また政治よりも戦争（戦闘行為）

が歴史を作るという思想が根底にあるようだ。組織論としては「リーダーと参謀の役割」というテーマが随所にあって全く飽きない。マンガ描写も独特で迫力満点である。

秦の始皇帝がいなかったら中国は現在の欧州のように２０数か国に分裂していた、という説がある。中華統一への方法論として「覇道」と「王道」については４１巻に詳しく描かれている。

6. 「データで読み解く中国経済」　川島博之著

著者は中国経済のこの２０年間の高度成長の要因が「土地の信用創造」であると分析している。地方政府は、中央政府の経済成長目標必達の為に土地使用権売買で数百兆円超の信用を創造し、金融面で経済成長を牽引してきた。この土地売買の過程で莫大な賄賂が横行し、汚職の源泉となったと分析している。従って昨今の莫大な腐敗汚職の原因は中国の伝統的慣習だけでなく経済構造と密接不可分であると結論している。

９億の農民の所得は依然低く、富裕層は一部の特権階級と都市住民である。習政権は腐敗撲滅キャンペーンで権力基盤を固めたようだ。しかし汚職の源泉が土地の信用創造であり、経済成長に不可欠な要素であったことで、汚職は続くだろう。そしてもしバブル経済が破裂すれば経済成長に壊滅的な影響が出ることは必定だろう。

中国共産党はこの構造を熟知しており、ＡＩＩＢや「一帯一路」などの大規模インフラ投資を言い出した。今年ハルビンに旅行した際、高速鉄道でハルビン～長春を移動したが、中国高速鉄道網は既に２万キロで世界最長とのことだ。しかし高速鉄道は１時間に一本間隔で乗客はガラガラであった。国内インフラ投資の限界を見たような感想を持った。

7. 「朝鮮戦争」　神谷不二著

１９６６年の出版である。当時マルクス主義歴史観が主導する言論界で初めて実証的に朝鮮戦争を分析した著書といわれている。

１９５０年６月２５日、北が南に侵攻した。その原因から戦争への米中の関与が詳細に論じられている。戦闘自体は翌年の７月にほぼ終結した。しかし停戦交渉に２年近くかかった。捕虜交換条件と戦後体制が主題だった。金日成・李承晩・毛沢東・マッカーサーがこの戦争の主人公である。

8. 「満州国演義１巻：嵐の払暁　２巻：事変の夜　３巻：群狼の舞　４巻：炎の回廊」　船戸与一著

５月連休に友人と２人でハルビンに旅行した。昭和初期経済不況に苦しむ日本にとって満州は「日本の生命線」といわれた。近現代史への関心から２年前から海外の歴史探訪を続けている。今回は３回目である。旅をすればその地の歴史を知りたくなる。帰国して友人にハルビン旅行談をしたところこの本を紹介された。

本書は、満州を舞台に敷島４兄弟（外交官の長男、馬賊の次男、憲兵隊の三男、早稲田大学生の４男）が織りなす歴史小説である。小説という手法から当時の時代状況を主人公達の心象風景を通して見事に描写されている。

１巻が張作霖爆破事件、２巻が満州事変、３巻が関東軍の暗闘、４巻が２．２６事件と日華事変をテーマにしている。人間の弱さ強さ醜さ偉大さなどが鮮やかに描かれている。

（注：満州国演義は２００７年に出版され全９巻が２０１５年に完成した。著者はその後まもなく死亡したので遺作となった）

9. 「キメラ」　～満州国の肖像～　増補版　山室信一著

キメラとはギリシャ神話の頭が獅子、胴が羊、尾が龍の怪物である。著者は、満洲国を獅子が関東軍、胴が天皇制国家（日本)、龍を中国皇帝および近代中国に比して描いている。「満州国演義」に触発されて数冊の満州国関連書籍を読んだが、この本が最も体系的で整理されているように思う。

満洲国とは何だったのか？これは２１世紀に生きる日本人にとっても重い問いかけである。それは先の戦争の発生要因を考える時、導火線のような歴史的事実だからである。最近張作霖爆破事件が「コミンテルンと関東軍による共同謀略」であったことが判明した。そしてこの事件への田中義一内閣の甘い対応が、その後の軍部独走を許したとの説もある。

10. 「米中もし戦えば」トランプ大統領補佐官　ピーター・ナバロ著

2017/1 米国大統領にトランプ氏が就任した。著者はその政権メンバーの一人である。この本は外交安保軍事に関係する幹部の必読書だそうだ。

内容は米中の戦力比較分析である。米中の軍事力（武力から情報技術文化経済構造など地政学全般）の強みと弱みを詳細に記述している。だからどちらが勝つとも負けるとも記載されていない。やってみないと分らないということだろう。しかし結論として「米中戦争が発生すれば、その被害とデメリットは両国にとって甚大」と当然の帰結を述べている。

だから「戦争勃発の可能性は低い」と結論するのは早計であろう。戦前の関東軍のような北朝鮮の動向は予断を許さない。

11. 「金正恩の北朝鮮独裁の深層」　　黒田勝弘・武貞秀士著（対談）

武貞氏によれば、「北は、核とミサイルで米国を半島から追い出し、北主導で南北統一するのが国家戦略」とのことだ。この２０年間の北の行動の根底にはこの国家戦略があるとのことだ。

尤も米国は北主導の統一を認めず、撤退することはないと予想される。北の目論見は挫折することになるだろう。しかし北は核とミサイル開発に邁進している。これは１９３０年代の日本の軍事政権の思考様式と非常に似ている。国際情勢認識が自己中心的で幻想に酔っている。年末に日韓慰安婦合意の見直しを韓国外務大臣が日本政府に打診した。南も北と同じような幻想を持っているようだ。

12. 「２１世紀の「脱亜論」　～中国・韓国との訣別～」　　西村幸佑著

最近福澤諭吉先生の「脱亜論」が注目されている。「脱亜」とは特定アジアである中国と半島（北朝鮮と韓国）を指しており、台湾や東南アジアは含まれない。福澤諭吉は、１８８５年３月１６日の時事新報で脱亜論を書いたが、当時は全く注目されなかったそうだ。１９６０年代になって左翼勢力が政府外交方針批判として取り上げられて徐々に世間に知られることとなった。

本書は、２０１５年出版であるが「脱亜論」の系譜が面白い。「脱亜論」は過去３回あったとのことだ。１回目は聖徳太子が遣隋使小野妹子に遣わした「日出処天子」と名乗った逸話。２回目は菅原道真の遣唐使制度の廃止。３回目は江戸時代の荻生徂徠・新井白石の古典文献学だ。

半島と中国との関わり方についていろいろ議論は多いが、「３国とは出来るだけ関わらないのが良い」との説はなかなか深みのある提案である。